

小野古墳

諫早市宗方町所在古墳の調査

諫早市文化財調査報告書

第 2 集

1978

諫早市教育委員会

II 小野古墳の調査

—諫早市宗方町所在—

例　　言

1. 本書は、昭和50年4月、個人の宅地造成中露見した古墳の緊急調査の報告である。
2. 本書の執筆、遺物実測、及び写真撮影は高野晋司が行った。
3. 本報告書作成にあたっては下記の人に助力を受けた。

溝口美津代…整　　図

望月　泰子…遺物整理

魚下　雅子…　々

4. 本文に図示した遺物は、鉄剣を除き、全て、遺跡発見者の稻田三千年氏の採集資料である。

序

この古墳群は昭和50年4月小野小学校裏の宅地造成が始まった際発見され、その後畠の深耕で石棺や古墳が次々に発見されたものです。最初のものは発掘調査のうえ小野小学校に移設保存しましたが、その他は調査のあと埋め戻して保存しました。附近には古墳や石棺がまだ各所にあるようです。

この地は眼下に小野平野から有明海を望み、背には金比羅岳を控えた格好の地で昔は有明海が足下まで入り込んでいたといいます。また、すぐ後ろの丘陵には小野城跡があるなど、昔は地形的にも重要な所であったものと思われます。

本書はその報告書ですが、郷土の歴史研究や教育に活用していただければ幸いです。この発刊にあたり、調査にあたられた県教育委員会文化課の御尽力と、調査に心よく御承諾をいただいた土地所有者に衷心より御礼を申しあげる次第であります。

昭和53年1月

諫早市教育長 前田勇夫

本 文 目 次

1. 遺跡の地理・歴史的環境.....	47
2. 調査の経過.....	50
3. 調査の概要.....	52
(1) 造構.....	52
(2) 副葬品及び周辺出土土器.....	55
4. むすび.....	60
5. 附録.....	61
(1) 石棺.....	61
(2) 磨製石剣.....	64

挿 図 目 次

第1図 謎早市位置図.....	46
第2図 遺跡位置図.....	48
第3図 遺跡附近図.....	49
第4図 石室実測図（1／30）.....	折り込み
第5図 鉄剣実測図（1／4）.....	55
第6図 土師器実測図（1／3）.....	57
第7図 須恵器実測図（1／3）.....	59
第8図 県内磨製石剣出土分布図.....	62
第9図 磨製石剣実測図（2／3）.....	63
第10図 遺跡地形測量図（1：800）.....	折り込み

表 目 次

表1. 県内磨製石剣出土地名表.....	63
----------------------	----

図 版 目 次

図版1 遺跡近景

図版2 石室全景

図版3 奥壁(上), 開口部(下)

図版4 石室閉塞状況

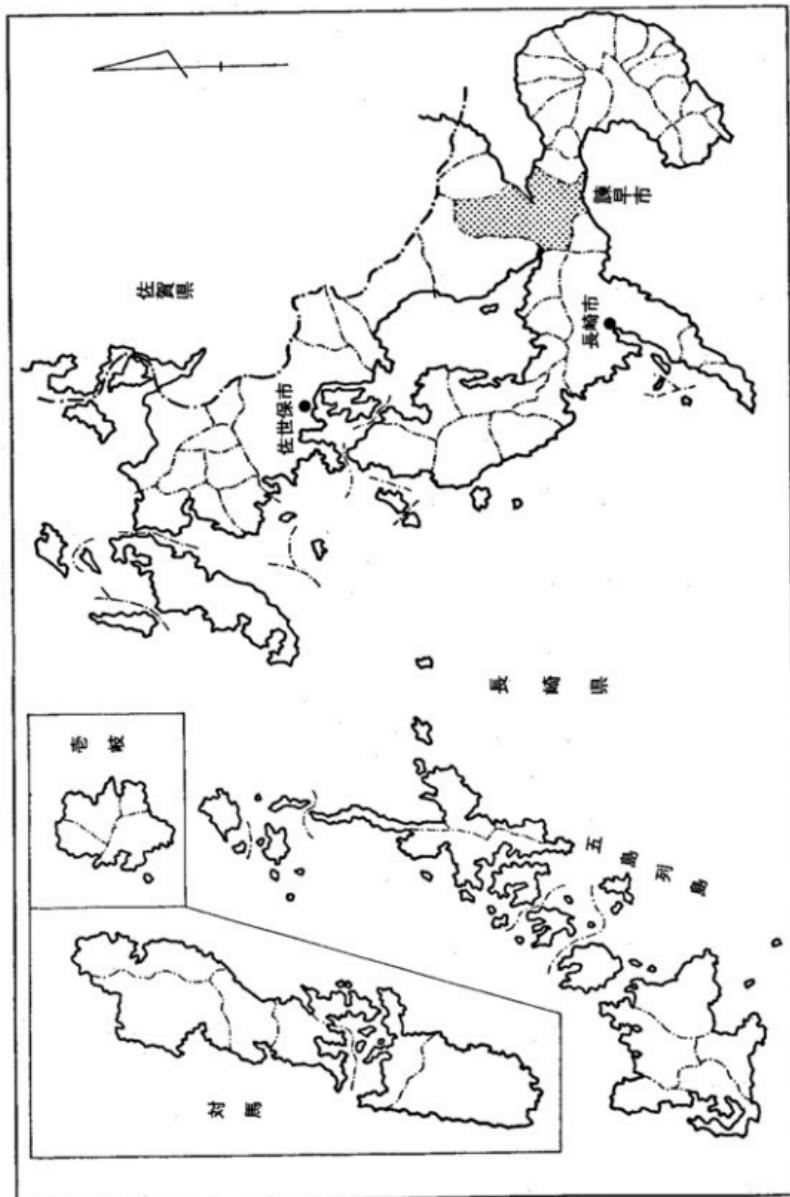
図版5 鉄剣出土状況(上), 調査風景(下)

図版6 副葬品(鉄剣)及び周辺出土土器

図版7 小野古墳石室移築復元作業

図版8 出土石棺, 磨製石剣

第1図 稲早市位置図



II 小野古墳の調査

1. 遺跡の地理・歴史的環境

諫早市東部に展開する諫早平野は、県下第二の広域性を持つと共に、極めて肥沃な成分を有する土壤を持つことでもよく知られているが、同時にこの平野は、その大部分が近世以後の造成による新田である事も又、了知されている。

現在に於いても、潮の干満の激しい有明海にあって、平野海岸部はその大潮時の平均潮位2.55mの標高に及ばず、南部山麓に到って始めて3~4mを有する程度である。つまり平野を構成する土壤は、河川、海流の運搬による泥土、あるいは微粒子から成る“がた”と呼ばれる沈殿堆積物であり、^{註1}その原因は通常河川が果たす扇状地形形成の要因を本明川が果たし得ない結果によるといわれている。^{註2}

平野南東部に位置する金比羅岳（253m）より派生する数条の丘陵は、扇状形を呈して北方に延び、小規模の低い台地を形成する。

この台地先端部分、標高15m（田との比高約10m）、ゆるやかに傾斜する斜面上に本古墳は位置する。詳しくは諫早市東方町387-1番地である。（図版1）

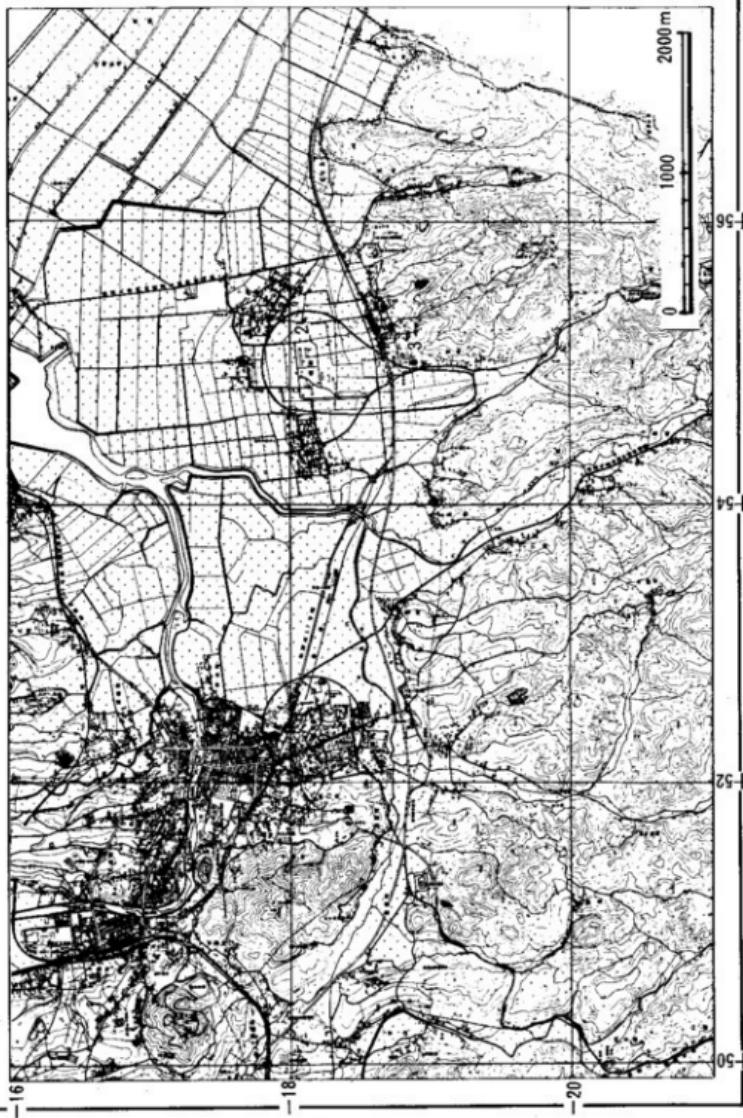
附近一帯の台地は、宮崎館遺跡として知られ、夥しい石器、石器剝片類に加え、縄文、弥生、土師器片、須恵器片等が散乱し、又、後方には中世の山城遺構（第3図）が見られるなど、古代より、生活址、墓地として継続して利用された複合遺跡である。^{註3}

この附近を文献よりみると、まず延喜式兵部省に船越駅（現諫早市船越町〔第2図-1〕）、本古墳より、西方市街へ約3kmに驛馬五疋の記述がみられ、大化の改新後、太宰府より布かれた西海道西路、すなわち太宰府—佐嘉—盤氷（現彼杵）一大村—船越を経て、野鳥（現島原）に到る旧道がこの一帯を通過している事が知れる。

一方、本古墳北方の田には、2の坪、3の坪、5の坪、8の坪等の数詞坪地名が残り、明らかに条里の痕跡を留めている（第2図-2）。^{註4}

干潟平野地形発達よりすると、標高5mが第1海岸線、同3mで奈良期、同2.5mで鎌倉、^{註5}2m以下が近世初期の海岸線と言われ、この事と、上述の歴史的環境を考えると、本古墳築造時に於いては、未だ国道以北の水田部については積極的に利用出来得る程の陸化はなかったものと考えるのが妥当であり、従って、同古墳被葬者達の経済基盤は、国道以南の狭少な地がその主たるものであったろうと推定される。^{註6}

第2図 進歩位置図(第1座標系)





第3図 遺跡附近図

- 註1 土井利夫「多良山麓の研究」昭和堂印刷 1965
- 2 諫早市北東部を大きく占める多良山系に源を発する本明川は、狭隘な谷筋を縫って裾部に到り、以下緩やかな勾配をもって諫早市街を抜け有明海に注ぐが、まさに平野部にさしかかる地点で、両側台地の突出による地形的制約を受けて、十分な層状地を形成し得ないという。
- 3 「全国遺跡地図42 長崎県」 文化庁文化財保護部 1976
- 4 この報文作成中、小野古墳南方約30mの地点より箱式棺出土の報があった。これについては後述する。
- 5 「諫早市史」第1巻 諫早市教育委員会 1955
- 6 前掲土肥氏の研究によると、当地北方水田部に存する条里遺構は、正南北位の坪割方向を持ち、最少限16坪の坪数を持つらしい。又、坪の内割りは現状よりすると長地型を主としている。その開拓時期については、残存文書により下限を13世紀とされるが、上限については定かでない。
- 7 広島大学 白井義彦氏の説とされる。

2. 調査の経過

昭和50年4月、諫早北バイパス建設に伴う発掘調査に従事していた筆者らは、同市小野小学校裏で、個人の宅地造成中、石棺が出土したとの報を諫早市教育委員会を通じて受けた。

早速現地を検分した結果、天井石は既に失っているものの古墳の石室であるとの確認をし、その保護措置について地主との協議をもつて工事を一時中断する事になった。しかし、その後の地主との協議で、石室が造成中心部分にある事や、工事をうけおった建設業者らの工事日程等を考慮に入れると保存は無理との意見が強くなり、緊急調査後、石室は小野小学校中庭に移築復元する事で合意に達した。

かくして、調査は、昭和50年4月24日～同30日、移築復元を5月1日～同2日の計9日間、前述の北バイパスの調査と併行して行なわれた。調査には、バイパス専従調査員3名の内、出川・高野が当たり、多くの人の参加援助を受けた。

参加者は下記の通りである。記して感謝の意を表したい。なお、調査を承諾していただいた土地所有者山崎友吉氏及び、巨石運搬に快く重機類を提供していただいた株木下建設に対し、心より御礼を申しあげたい。

諫早市教育委員会：社会教育課長野崎潮、同課長補佐石原憲城、同主事田嶋将、同主事木原保夫、同主事松尾昭男

有喜中学校：教頭山口八郎

諫早史談会：嘉村武一

諫早図書館：川原万平

小野小学校：福田三千年（石室発見者）

県文化課：文化財保護主事田川肇，同高野晋司，同副島和明

（敬称略）

上述した如く、石室は天井石を既に失くし、その輪郭のみが露出していた。調査は、石室内に充填された拂土を取り除く作業から始め、同時に層位をみる為、両側壁、及び奥壁、開口部に巾50cmのトレンチを入れた。石室内、及び周囲の土は、礫混じりで極めて固く、スコップの刃も通さない程で、土を軟らかにする為、しばしば水を十分注入する有様であった。

結果、石室内からは、縄文晚期土器片、弥生前・中期土器片、石錐、石器剝片、須恵器片、土師器片、滑石製石鍋破片に加え、極めて最近の瓦・陶磁器類が出土し、攪乱が数回に及んでいるのが知れた。

調査中、石室より南東4mの至近距離に天井石らしき $2.1 \times 1.7 \times 0.6$ mの巨石が発見され、又この附近で須恵器片、土師器片が同時に表採された。本古墳に確実に伴うかどうかの断はつけ難いが、一応共伴遺物として取扱っておく。

4本のトレンチの結果、層位の攪乱はかなり下層まで及んでいる事が判り、結局、古墳築造時の堆積状況は不明に終った。又、当然ながら、墳丘についても、相当の上部土取りの関係での有無を確認し得なかった。（図版2）

以下は、露見した石室造構、及び副葬品、それと、古墳周囲よりの出土須恵器・土師器である。

註1 「諫早北バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第1集 図録編」長崎県教育委員会 1975

3. 調査の概要

(1) 石室 (第4図、図版2.3.4)

三枚の巨石を三方に配し、小口部を比較的薄い板材で閉塞する小形の石室である。南西に向って開口し、玄室長は輪線上で2m、幅は奥壁部で1.3m、閉塞部で1mと、奥壁の方が若干広くなっている。

石室内には、上記石材の他に三枚の板石が認められる。すなわち、閉塞に近く、北壁に沿った一枚(A)、奥壁と北壁との間に一枚(B)、そして奥壁に接し、南側壁に沿っての一枚(C)である。この場合、Aと北側石との間には約10cm程のすき間が認められる。

床面には、全面にわたって扁平な角ばった板石が敷かれ、それらの間隙には、部分的ながら小さな栗石が充填されている。只、枕石とおぼしきものは見当らない。又、石室内北壁の東側部分、奥壁の全般、及び敷石の一部にベンガラの塗布が認められる。且つて全面にあったものか、あるいはこの部分のみの特徴かは判断出来ない。

開口部については、まず両側壁に接するように欄石を横たえ、その外側に袖石として二枚の石を対にして立てかける。更に両袖石に接して、やや大きめの板石を置き、最後に数個の塊石で外から押さえて閉塞を完了している。又、北側壁と欄石とのすき間、及び南側壁と袖石の間には、クサビ状に石が打ち込まれ、構築の際生じたすき間を埋めている。只、欄石と閉塞石との間には、なお僅かながら空間が生じている。

閉塞石の外側には、両側共、三段積み位の低い小規模な積み石が外方に広がり、前庭部を成すものと思われるが、北側に於いては既に石材は失なわれ、南側についても、どの位の長さを持つものかは不明である。

なお、全体的な形状は「只」字形を呈している。

石室の構築に際しては、まず奥壁を据えて、それにもたれかけるようにして側壁を立てる。この時、奥壁と側壁との間に下方で若干すき間が生じている。このすき間を埋めるのが、上述のB・C両板材の役目である。

据えられた三枚の巨石の上部レベルはほぼ一致し、更に、北側壁上端には天井石を水平に設置する為に、三ヶ所に「矢」の痕跡が認められる。この事は、このレベルがすなわち天井部のレベルであり、三枚の巨石を腰石として更に石積みをする一般的な石室構築法とは異なる事を示している。これによると石室の高さは、せいぜい80cmに留まる。

閉塞部については、袖石は勿論、閉塞石についても、その上端が石室高に到らず、従って、この石を基礎にして、なおかなりの石材を積み上げて閉塞を終えたものと思われる。

副葬品については、明確にそれと断定出来るものは南側壁に沿い刃先を開口部に向ける鉄劍

の石室である。南面に向
と、奥壁の方が若干広く

閉塞に近く、北壁に沿つ
壁に沿つての一枚（C）
れる。

間隙には、部分的ながら
又、石室内北壁の東側部
って全面にあったものか、

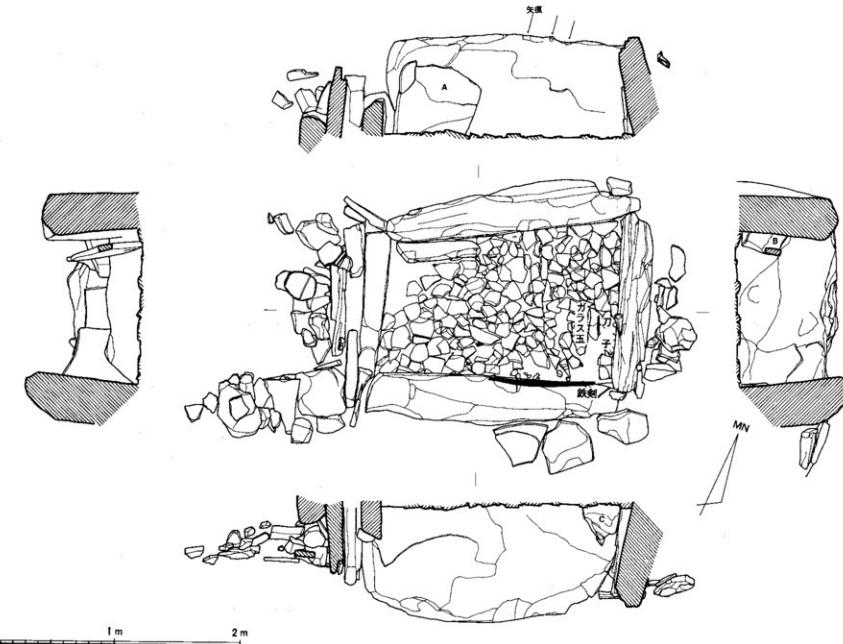
外側に袖石として二枚の
置き、最後に数個の礫石
。及び南側壁と袖石の間
る。只、礫石と閉塞石と

方に広がり、前庭部を成
いても、どの位の長さを

うにして側壁を立てる。
すき間を埋めるのが、上

端には天井石を水平に設
ベルがすなわち天井石の
構築法とは異なる事を示

室高に到らず、従つて、
のと思われる。
先を開口部に向ける鉄劍



第4図 石室実測図（1 / 30）

1振と、奥壁に平行して置かれた刀子1本、及びガラス玉4個のみである。

先述した如く、排土で充填された石室内からは、縄文・弥生土器片に混って若干の土師器・須恵器片が出土しているが、その状態は全くの混在であり、明確に副葬品として理解し得ない。

なお、副葬品の配置等からみると、被葬者は軸線に添つて東枕されていた事は明らかである。

(2) 副葬品及び周辺出土土器

鉄剣 (第5図、図版5.6)

全長83.8cm、剣身長67.8cm、茎長16cmの長大な剣である。茎と剣身の比は1:4.2となる。鍔は明瞭でなく、断面は剣身でレンズ状、茎部で撫角の長方形を呈する。身の最大巾は関部で4.6cmを計り、刃先に向って少しづつ細くなり尖り鋒を有する。刃部は鋭く全体的な姿は極めて端正である。厚みは関部で7mm、茎部で4mm程度である。関はやや直角に近い両削関を呈する。茎は広身の剣身に比して細く、最大巾で2.5cm、茎尻で1.7cmを計る。目釘穴は1個あり、径4mmの大きさで、茎尻より約2cm所に位置する。柄部には部分的に木質が附着しているが明瞭でない。

本県に於ける鉄剣の出土は、調査例の僅少さからすると当然であるが、^{註1}対馬での3例を除いては皆無に等しい。一方、西北九州に目を向けても、刀、刀子等に比すと極めて例が少ない。

通常前期古墳の副葬品として普遍的であるといわれるが、特定の古墳に大量に副葬される例を除くと、^{註2}その出土比率は低いと言わざるを得ない。只、宮崎・鹿児島県を中心とする地下式古墳については、その出土比率は大となり地域的な特色として他地方と一線を画している。

長さに目を向けてみると、このような長大な剣の出土例



第5図 鉄剣実測図(1/4)

^{註4}は少なく、成川遺跡出土の75cmと同様最長の部類に属する。
この他、長い部類では、若八幡古墳、片山古墳11号墳、栗崎山古墳4号墳、名子道遺跡1号
^{註5}墳等で50~62cmが知られるが、他は、前述の成川遺跡、飛山1号墳、山の前3号大石室、原古
^{註6}墳2号墳、菖蒲浦1号墳、炭焼古墳群5号墳及び、対馬3遺跡出土鉄劍に見られる如く、通常
^{註7}30~45cm程度の言わば短劍の部類に属するのが大半である。

次にこれらの鉄劍が属する古墳の時期をみると、4世紀末より連續し、6世紀中頃まで見られるが、その大半は5世紀代の古墳に多く、6世紀に入るとその数は激減する。

副葬品による時代的特徴は、出土した様々の遺物、副葬した古墳の形態、その社会的背景等、諸々の要素を加味して考えるべきであり、一個の遺物でもって決定するのは極めて危険であるが、攻撃的武器の変化という形よりすると、その使用下限はかなり、限定されるものと思われる。

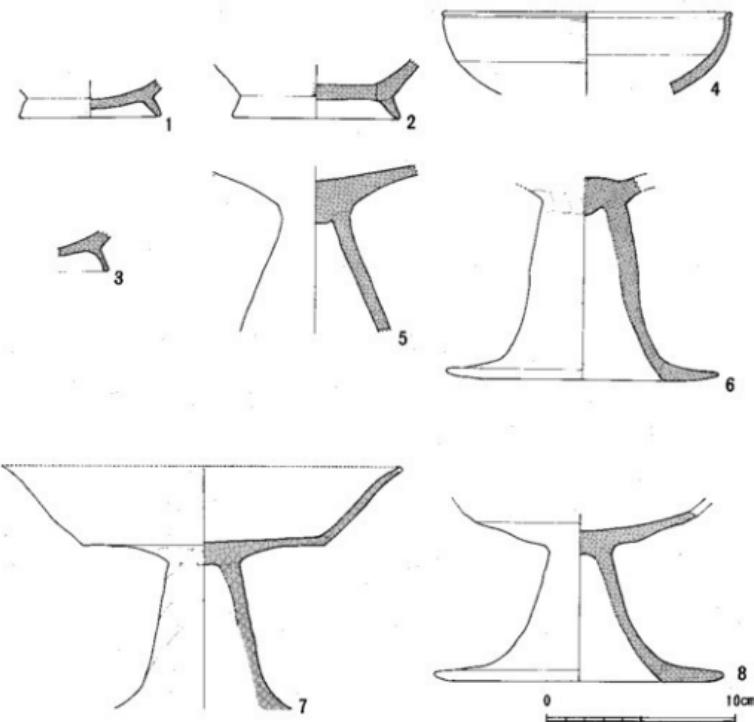
- 註1 海落遺跡2号石棺、貝崎古墳、チゴノハナ1号石棺に見られる。「対馬」長崎県文化財調査報告書第17集 長崎県教育委員会 1974
- 2 譲内では、前期より、大阪府大塚山古墳、同柴金山古墳、同七觀山古墳、同アリ山古墳、奈良県メスリ山古墳等に於いて大量の鉄劍の副葬がみられる。
- 3 例えれば、「日本の考古学IV」に於ける九州主要古墳分布表をみても、鉄劍の出土比率は、宮崎・鹿児島県を除くと5~20%位である。
- 4 「成川遺跡」 文化庁 1973
- 5 「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第2集」 福岡県教育委員会 1971
- 6 「片山古墳群」 福岡県文化財調査報告書第46集 福岡県教育委員会 1970
- 7 「栗崎山古墳群」 栗崎山古墳群学術調査団 1973
- 8 「名子道遺跡」 1972
- 9 「和白遺跡群」 福岡市文化財調査報告書第18集 福岡市教育委員会 1971
- 10 「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ」 福岡県教育委員会 1972
- 11 「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第2集」 福岡県教育委員会 1976
- 12 「太宰府町の文化財第1集」 太宰府町教育委員会 1976
- 13 「炭焼古墳群」 福岡県文化財調査報告書第37集 福岡県教育委員会 1968
- 14 鉄劍の出土時期は勿論弥生中期に始まり、以後各地で継続するものであるが、ここでは一応古墳時代以降のものを取り扱っている。

土師器（第6図、図版6）

以下の土師器、及び須恵器は何れも古墳周囲での採集資料であることをあらかじめ断っておく。土師器は図示し得るものは、壺・碗及び高壺の三種である。

壺（1～3） 何れも淡黄灰色で胎土に微粒砂、雲母を含み、焼成は概して良好である。破片の為口径は不明。仕上げはヨコナデによる。薄くて長い高台が外側へ張り出している。2及び3の内面は焼した為か黒色又は黒褐色を呈している。

碗（4） 色調は黄褐色、焼成は良好である。底部から丸味を持って上方に及ぶが、胴中位でやや屈曲し、口縁へ移行する。口唇部はやや外反する。表壁の口縁部分及び内面は黒褐色を



第6図 周辺出土土器 ① 土師器（1 / 3）

呈する。仕上げは上方でヨコナデ、胴下半部は斜めにナデて調整している。

高坏（5～8） 何れも風化の為表面が剥落し、仕上げ調整痕は不明瞭である。色調はそれぞれ若干異なるが、胎土に小さな石英粒を含み、焼成があまり良くない事は共通している。5・7には粘土まきあげによる接合痕が認められ、5・6では坏身底部に脚柱を挿入する手法をとっている。全体として坏身内側底部は水平で、直線的に外反する脚部との境は明瞭である。又、脚柱は、中央部が若干脹れ、下方に到り強く外方に屈曲し、ラッパ状に広がり安定感を与える。なお裾端部は何れも丸くなる。又、成形に際しては、坏身、脚部でそれぞれの上半と下半とを一度接合している。

これらの土器の内、坏及び碗についてはその類例が太宰府に認められ、それによると大旨^{註1}10世紀前半に比定されている。又、高坏については、炭焼5号墳、横田下古墳、道添第12号住居址^{註2}、及び塚原古墳群中の丸山13号墳、同20号墳、6号方形周溝墓等にその類例が認められる。これらは何れも所謂和泉式に属するものであろうが、本古墳のものは炭焼古墳群のものよりは一時期後出するものとして5世紀前半に比定しておきたい。

須恵器（第7図、図版6）

坏蓋、臘、甕の三種が認められる。

坏蓋（1～3） 1及び2は、天井部と口縁との境に鋭く短かい稜線がつく。口縁は僅かに外へ開き、1では稜線より端部まで2.4cmを計る。天井部にはヘラ削りが認められ、端部内側には1本の沈線が入る。色調は何れもねずみ色で焼成は良く堅緻である。3は推定口径12.8cmで1・2より小形である。天井部と口縁の境の稜線は丸みをおび、その下に沈線が表現される。稜線と口縁端部は2.2cmとやや短くなるが、端部内側の沈線は逆に鮮明である。色調は濃いねずみ色で、焼成良好堅緻な仕上りである。

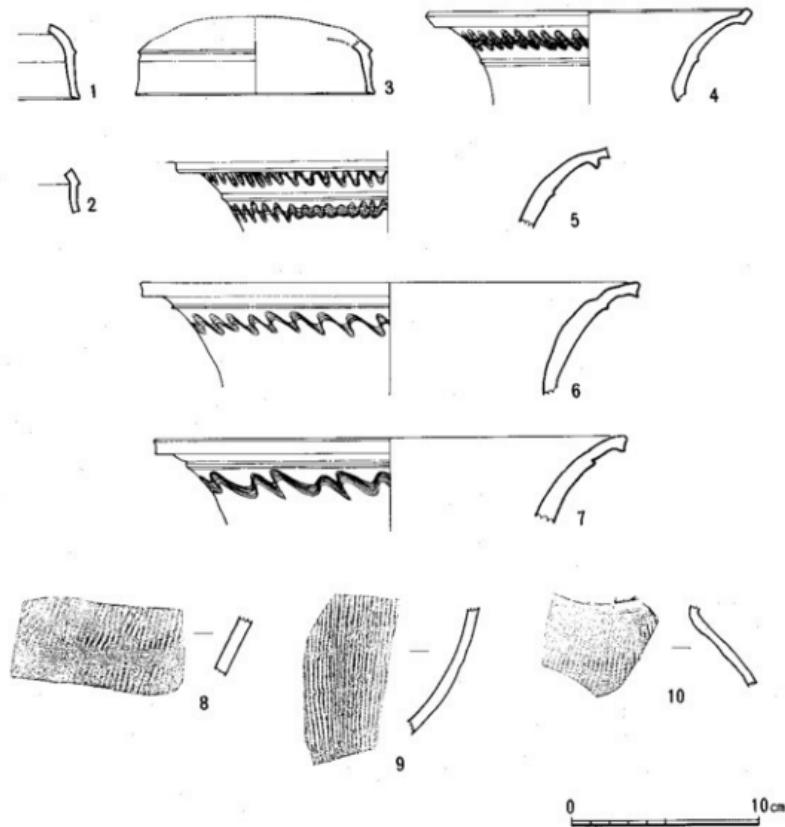
臘（4） 4は臘の上半部であろう。口径17.5cm、薄手で黒灰色を呈する。口縁は大きく外反し、頸部中央に1本の稜線が入る。全体にカキ目を施すが、口縁端部と稜線の間は櫛描き波状で飾る。

甕（5～10） 5は口縁直下に高い稜を持ち、更に頸部中程に低く鋭い稜を配し、上下二段に櫛描き波状文を這らす。6・7は口縁直下に丸味を帯びた稜を持ち、その下を同じく櫛描き波状文を施している。なお6には濃緑の自然釉が附着している。器壁は3個共一定し、やや厚手である。以上3個の特徴は、いずれも口縁端部にみる如くシャープであり、特に5については頸部の稜は鋭く、又施された文様も繊細である。

8・9は甕胴部である。何れも平行叩きを行っているが、8ではその上にカキ目が巡る。10

は斐胴上半部である。外反する頸部を経て急速に胴部が張り出す。調整は、外面で平行叩きの上をカキ目が巡り、内面では、同心円文が顯著である。

以上の須恵器は、壺蓋で大旨小田富士雄氏編年のⅢA期の特徴を持つものと思われるが、1
・2については更にさか上の可能性がある。又、甕については福岡県飛山1号出土のものと酷
井6
井7
似し、縦内に於ては、ON53甕に類例が認められ、それらの年代はI型式第4段階までさか上の
と思われる。



第7図 周辺出土土器② 須恵器 (1 / 3)

- 註1 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の土師器に関する覚え書き」 九州歴史資料館研究論集2
九州歴史資料館 1976
- 2 「炭焼古墳群」 福岡県文化財調査報告書第37集 1976
- 3 「土師式土器集成」 本編2 東京堂 1973
- 4 「福岡県八女市室岡所在遺跡群調査概報」 福岡県教育委員会 1972
- 5 「塚原」 熊本県教育委員会 1975
- 6 「和白遺跡群」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第18集 1971
- 7 「陶邑古窯址群」 平安学園考古学クラブ 1966
「陶邑I」 大阪府教育委員会 1976

4. む す び

以上述べた如く、図示した遺物については、5世紀前半～10世紀前半、須恵器が6世紀前半～中頃に比定される。鉄劍は5世紀中頃～6世紀前半に比定しても大過はあるまい。

これから遺物を本古墳の副葬品として考えた場合、この年代幅は土師器の後出の一群は別として追葬等による結果であろうか。最後にこれらの時期的な問題にふれてむすびとしたい。石室の構造について今一度検討してみる。

石室プランは「只」字形を有し、両軸式の横穴式石室の構造を持っているが部分的には幾つかの問題がある。

まず、構築に際しては、両側壁、奥壁、天井石とも一枚の巨石を用い、扁平あるいは塊石による割石積みの痕跡は全く見られない。又、その室内法量は $2 \times 1.2m$ 、高さに於いて約80cmと小さく、やや大きめの石棺としての企図も感じられる。

又、閉塞部についても、両軸石、及び閉塞石は、通常箱式石棺に使用する扁平な板石で、しかも相方共、それのみで天井部まで届かず、天井石とそれらとの空間には他の相当の石材が必要な程複雑な閉塞状況である。

通道もしくは前庭部については、積み石の延長が不明なため不明瞭である。

これらの特徴は、プラン的に横穴式石室を満足させても、その構築設計の意識の根底には未だ箱式石棺の名残りが認められよう。^{註1} 只、東宮ノ尾古墳群等に見られる石棺系石室とは構造に於いて全く異なり、竪穴形横口式石室と呼称されるものに於ても、形態上の概念規定に及ばない。^{註2}

以上のように、5世紀代を中心とするそれらの古墳とを比較すると、明らかに後出のものと

思われるが、未だ意識に於いてそれらと相通じるものがある事を考えると、普遍的な横穴式石室の時期まで下降させる事は出来ない。

従って、本古墳の築造時期は竪穴式石室として古式に編年される隣接の大村市黄金山古墳より一時期後出の6世紀前半位に比定したい。これは周辺出土須恵器の時期とも大旨一致し、且つ鉄剣の時期とも矛盾しないものと考える。なお、追葬の可能性については、閉塞部の安易な造りからすると、十分その可能性は残る事を記しておきたい。

又、古式の土師器については、周辺にお相違の石棺收藏の可能性が強いことから、それらに伴う可能性がある事を示唆しておく。後出の土師器は、時期が10世紀に入る事から、周辺の歴史的環境をふまえて、別の機会に考えてみたいと思う。

- 註1 「東宮ノ尾古墳群」 北九州市文化財調査報告書第14集 北九州市教育委員会 1974
2 「片山古墳群」 福岡県文化財調査報告書第40集 福岡県教育委員会 1970
3 柳沢一男「北部九州における初期横穴式石室の展開」『九州考古学の諸問題』東出版 1975
4 小田富士雄「長崎県大村市・黄金山古墳調査報告」九州考古学39・40 1970
5 小田富士雄氏編年による。

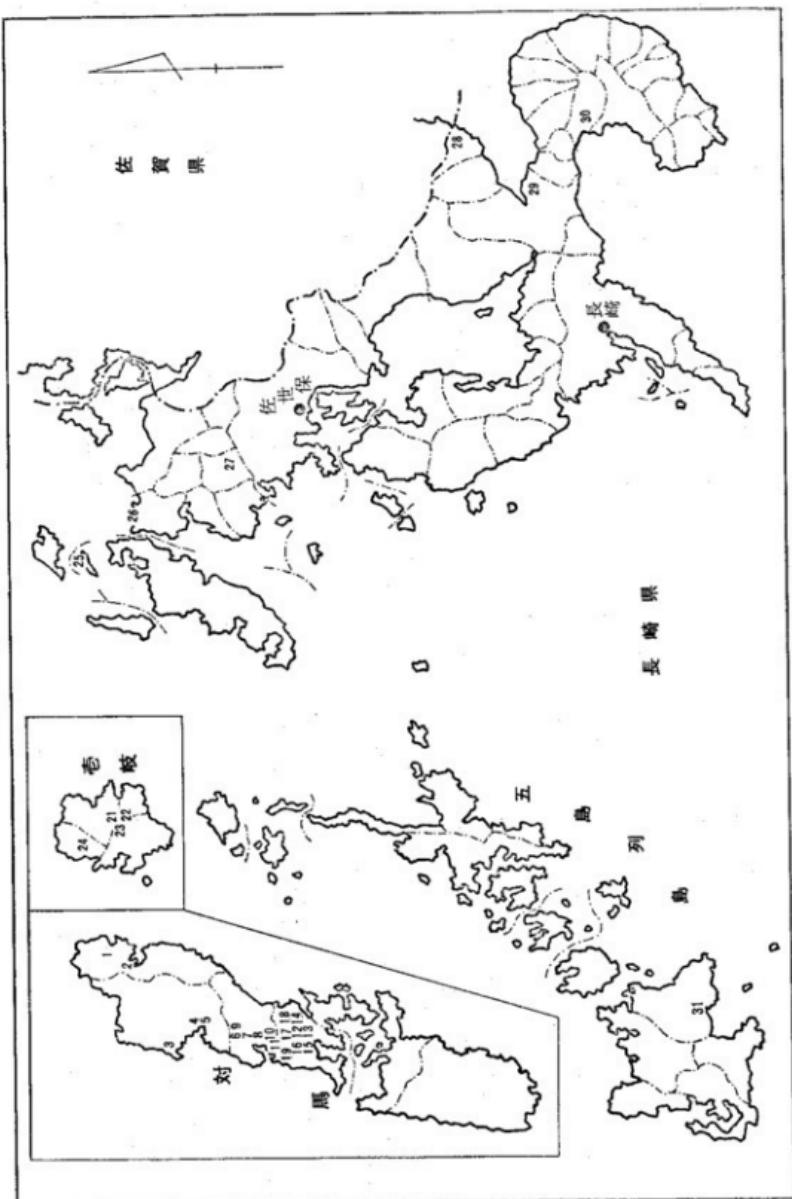
5. 附 錄

前段で触れた如く、本報文作成時、諫早市教育委員会を通じて同市宗方町で箱式石棺が出土したとの報が入った。ブルドーザによる耕地の天地返しの折見つかったもので、早速県文化課職員が現地へ赴き、その保存について地主と協議した結果現在の深さ以上については深耕しない事でそのまま埋め戻しを行ったという。以下石棺記述の項は報告者の説明による。

(1) 石 棺 (第3図内、図版8)

地表下約45cmで出土し、大旨軸を南北に向けている。角閃安山岩の板石を利用し、木口は1枚づつ、側壁はそれぞれ2枚の石材を用いるが、両側石で木口を狭む日形の形状をなす。法量は長径で155cm、短径は45cmと55cmで南側木口の方が若干広い。深さ及び内部については、露見後すぐ埋め戻した為不明である。

第8図 県内磨製石剣出土分布図



この附近の畠地には、その仕切りや簡単な石垣等にこのような板石が多く利用され、破壊された石棺材の転用と考えられる。しかし、現在でも、なお相当数の石棺が包蔵されている可能性が強い。

表1. 県内磨製石剣出土地名表

地図番号	遺跡所在地	出土状況	個数	形 式	共伴遺物	時 期	参考文献	備 考
1	上県郡上対馬町泉	箱式石棺	2	B1b・不明1			9	
2	上県郡上対馬町舟志嶽原神社	宅 地 内	1	B II			9	
3	上県郡上原町志多留シゲ		1	有柄式			8	
4	上県郡上原町工エイタノダン	箱式石棺	1	有柄式			8	
5	上県郡上原町櫻滝・金幕	箱式石棺(?)	1	B I b			9	
6	上県郡峰町井手		1	有柄式			8・9	
7	上県郡峰町三根下ガヤノキ日御	箱式石棺	2	B1b・E	銅 刻		8	
8	上県郡峰町三根タカマツノダン		1	E			8	頁岩質枯板岩
9	上県郡峰町木板・絆ノ原		1	E			8	
10	上県郡峰町吉田・エビス山	箱式石棺	1	有柄式				
11	上県郡峰町吉田チゴノハナA	箱式石棺	1	B II			8	
12	下県郡豊玉町仁位堂ノ内A		1	B II			8・9	
13	下県郡豊玉町仁位堂ノ内B	箱式石棺	1	B II			9	
14	下県郡豊玉町仁位山田		1	D			8	
15	下県郡豊玉町仁位・ハコウ	箱式石棺	1	B II		中期以降	9	頁岩
16	下県郡豊玉町仁位(伝)		1	B II			8	
17	下県郡豊玉町加志々中学校A	箱式石棺	1	B II			8	頁岩
18	下県郡豊玉町加志々中学校B	箱式石棺	1	有柄(?)	磨製石鏡3	前 期	8	卵白色頁岩
19	下県郡豊玉町佐保役場跡(伝)	箱式石棺	1	有柄式			8	
20	下県郡内某所		1	不 明			8	
21	老岐郡芦辺町深江原の辻		1	E	多 数	中 期	10	
22	老岐郡芦辺町深江原の辻		1	不 明				
23	老岐郡芦辺町深江		1	不 明			11	
24	老岐郡勝本町立石仲触カラカミ		1	E				
25	平戸市度島字小川		1	E			12	
26	北松浦郡出平町里田原		1	E	多 数	中 期 初頭	13	
27	北松浦郡世知原町木浦原		1	E			12	
28	北高来郡小長井町田原 大宮良		1	E			14	
29	諫早市宗方町	箱式石棺(?)	1	E		中期前半		
30	南高来郡愛野町黒谷		1	不 明			15	
31	福江市大浜郷	砂 丘	1	〃			16	ス レ ート
			計33					

時期は何れも弥生時代。 参考文献は註に記載。

(2) 磨製石剣（第9図、図版8）

上述石棺の東方約20mの畠より出土したものである。表採品である為出土状況については明確さを欠くが、近辺には石棺材が壊されて散乱し、又弥生前期末～中期初頭の土器片が多く見られる事から、その時期に比定される石棺の副葬品とみて差しつかえあるまい。

現在長9.6cm、上半部を欠損するが、推定長15cm内外の小型石剣である。表面の風化が著しく、両面共剥落がみられる。石質は玄武岩に見えるが定かでない。刃部は鋭く、一部に使用痕らしきものが認められる。

鎌は明瞭ではなく、断面は剣身部で杏仁形、柄部で撫角^{注1}の長方形を呈する。有光氏の分類によれば、鉄剣形のE形に属し、対馬を除く九州に最もよくみられるものである。

ここでは、県内出土の磨製石剣に限って出土地名表を作製し（表1）その表中より見られる幾つかの問題について若干の説明を行いたい。

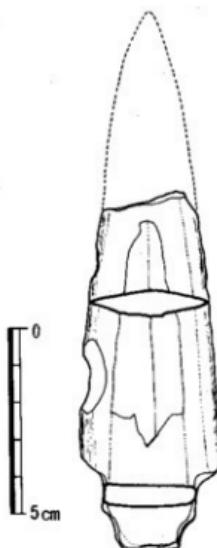
①出土状況については、出土例、量共圧倒的多数を占める対馬での箱式石棺内出土を除くと、棺内副葬例は全く見られない。

②出土剣の形式については、対馬を除き、全て、鉄剣形のE形に属する。

③出土分布をみると、対馬、壱岐、平戸、北松浦郡等県北に集中し、佐世保、彼杵、大村等の県央地区をとび越えて諫早、小長井に及ぶ。

①の問題であるが、県内に限らず県外の出土状況をみても、その出土総数に比して棺内副葬例は極めて少なく、中にはスダレ遺跡K-3の人骨に嵌入されたままの資料に見られる如く、戦斗の結果を示す出土例もある。その他必ずしも副葬品として考えるには不自然な例も多く、副葬品としての用途より、日常生活品としてより多く使用されたと考える方が自然であろう。一方対馬に於ける状況は、石剣副葬を一般とする朝鮮半島南部の在り方とよく一致し、又、石剣の形の多様さ等を考慮に入れると、半島の墳墓をそのまま踏襲した地域的な特殊性と言ふ事が出来よう。

②の形式の相違については、合わせて機能的なものを考慮に入れる必要があろう。この種の形式は周知の如く、「…ナカゴガ巾広くなり、闊は一直線をなさず…」とあり、つけ加えるならナカゴが短かい所に特徴がある。これは、茎が細長く闊が一直線になるAb形に比すると、



第9図 磨製石剣実測図

当然ながら打撃に対して折損の可能性は少なくなる。この事は、それだけ石剣の使用頻度が高く、より丈夫なものとの必要にせまられた事を示唆しているものと思われる。県内に限らず完形品の少ない事は、折損した場合、研磨を行って再度使用した結果ではなかろうか。只着柄について、多少の問題が残るが、「石槍」として報告されている例がある如く、出土石剣の中にはその形状より見て槍先として使用された例があるものと思われる。本遺跡出土の石剣もその可能性が強い。

③の出土分布は、その出土地は、県内に於ける青銅器の出土地域と一致する。この事は又同時に広く知られた、弥生遺跡の分布とも一致する結果にもなっている。つまり、対馬、壱岐、北松浦郡^{註5}等は広域な北九州文化圏の範疇に入り、諫早、小長井は、有明海を媒介とし、筑後、肥後地方と直結する位置にある事がこの現象を生んだものであろう。

石剣の出土時期について触れておきたい。

磨製石剣は弥生前期初頭より現われ中期後半には姿を消すものと言われているが、本県出土のものは、明確に前期に比定される資料はなく、何れも中期初頭～中期後半位までのものである。

なお、県内出土例中、福江市大浜出土の剣、及び小浜町黒谷出土のものについては、何れも異形であり、石剣の範疇に入れるべきかの疑問が残る。

註1 有光教「朝鮮磨製石剣の研究」 京都大学文学部考古学叢書第二冊 1959

2 水井昌文・橋口達也「スダレ遺跡」 穂波町文化財調査報告第1集 穂波町教育委員会 1976

3 高倉洋彦「弥生時代副葬遺物の性格」 九州歴史資料館研究論集2 1976

4 註1に同じ

5 崔夢龍「全南地方에서 새로이 発見된 先史遺物」 湖南文化研究第七輯 1975

6 松浦市では箱式石棺より内行花文鏡が出土している。 正林謙「柏ノ木遺跡」 松浦市教育委員会 1973

7 謳早市船越町（前掲第2図1）で細形銅劍が出土している。 正林謙「諳早市出土の銅劍」 九州考古学41 1971

8 小田富士雄「磨製石剣」「対馬」所収 長崎県文化財調査報告書第17集 1974

9 「対馬」 東方考古学叢刊 1953

10 鯖田忠正「長崎県壱岐郡田河村原ノ辻遺跡の研究」 1944

11 藤田和裕「原の辻遺跡」 長崎県文化財調査報告書第26集 1976

12 楠口隆康・鈴田正哉「平戸学术調査報告」 京都大学平戸学术調査團 1952

13 「里田原遺跡略報II」 長崎県文化財調査報告書第18集 1974

- 14 正林護「先史古代」『小長井町史』 1976
- 15 桑山龍造「五島の一般調査」『五島遺跡調査報告』 長崎県文化財調査報告書第2集 1964
- 16 宮崎一彰・古田正隆・上田俊之「島原半島の古代文化」 1962

なお、地名表作製に際しては、県文化課諸兄、及び県立美術博物館下川達彌氏、立平進氏、佐世保文化科学館久村貞夫氏に種々御教示を賜わった。又、地名表中、対馬に於ける集成については、上掲「対馬」(1974)に負う所が大きい。

報文脱稿後、再び同地より箱式石棺が出土したとの報があり、現地を検分した結果、前掲の古墳石室と同型のものである事が知れ、同遺跡附近一帯、破壊された分を除いても、まだなお相当数の石棺・石室が埋蔵されている事実を確認した。

この時の処置としては、出土地点を記録した後、地主の了解のもとにそのまま埋め戻しを行ったが、今後更に石棺等の出土が予想される為、この地域の十分な観察と、丘陵一帯の広範な地形測量の必要性を感じ、昭和52年3月下旬、下記の人達の協力のもとに、県文化課、副島和明、宮崎貴夫が測量を行った。(第10図)

協力者

山口祐造(諫早市教委、社会教育課参事)

古賀 力(長崎県文化財保護指導委員)

稲田三千年(小野小学校)

結果、現在までに発見された数は、古墳石室2基、弥生石棺3基、弥生甕棺1基で、何れも、丘陵先端部より上方(標高10~20m)の斜傾地上に位置し、墓域は、未確認ながら約15000m²に及ぶものと推察される。

県中央部はもとより、県下に於いても、このような大規模な墓址は稀であり、その保存について十分な配慮が必要であろう。

第2集 1964

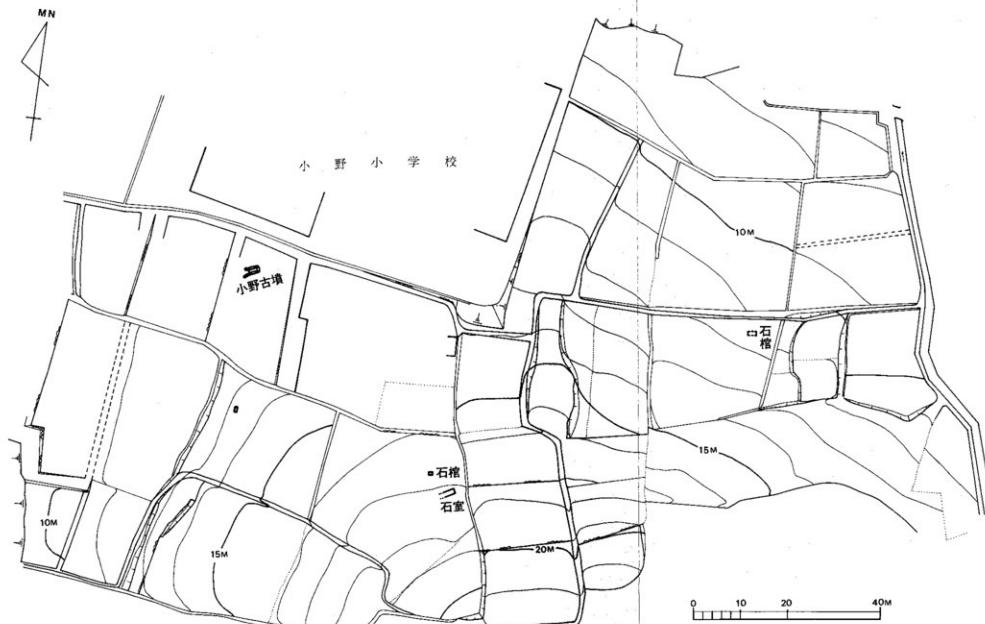
川邊源氏、立平進氏、
村島に於ける集成につ

を検査した結果、前掲の
分を除いても、まだなお

にそのまま埋め戻しを行
察と、丘陵一帯の広範な
とに、県文化課、副島和

弥生墳1基で、何れも、
未確認ながら約15000 m²

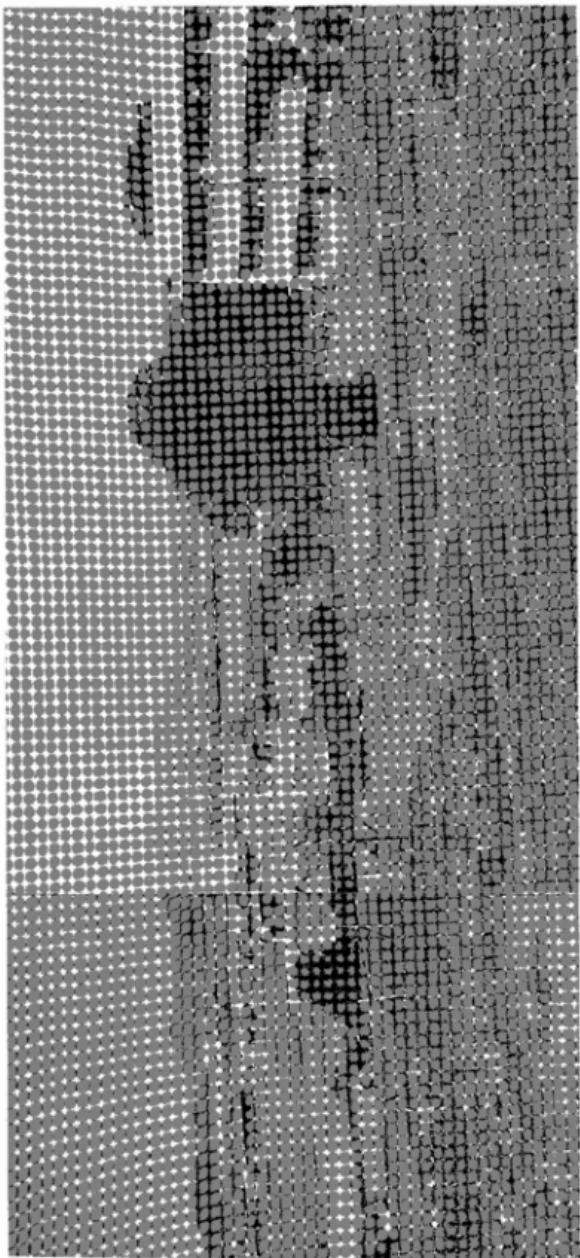
桶であり、その保存につ



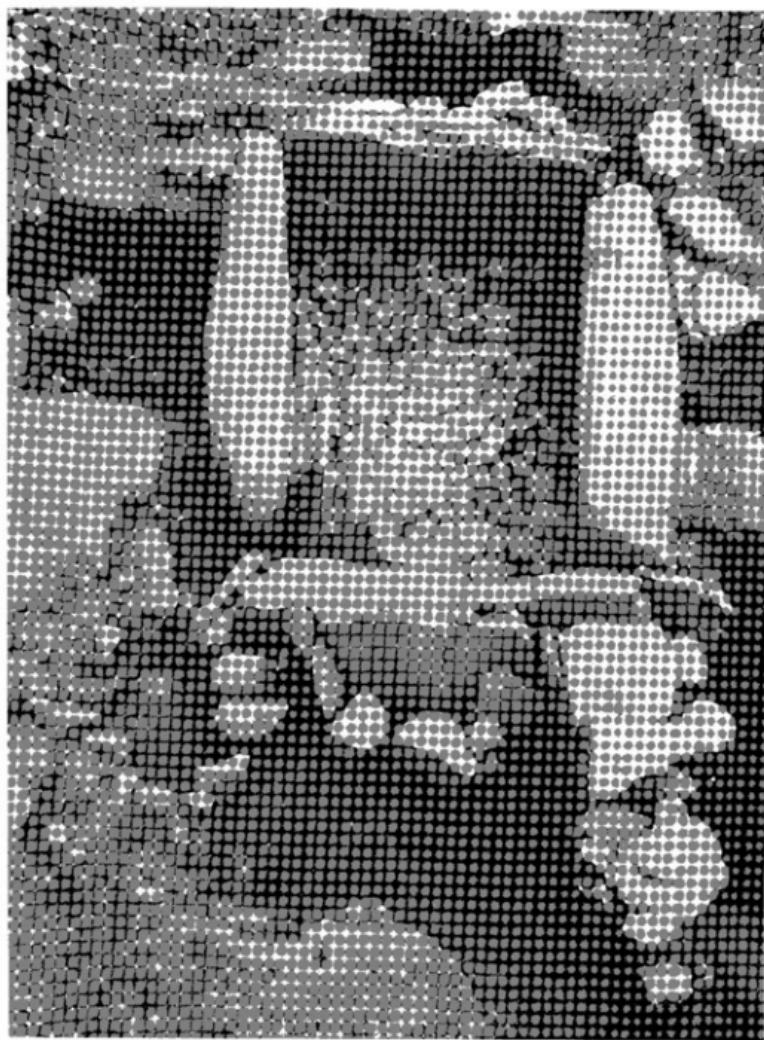
第10図 進路地形測量図(1:800)

図 版

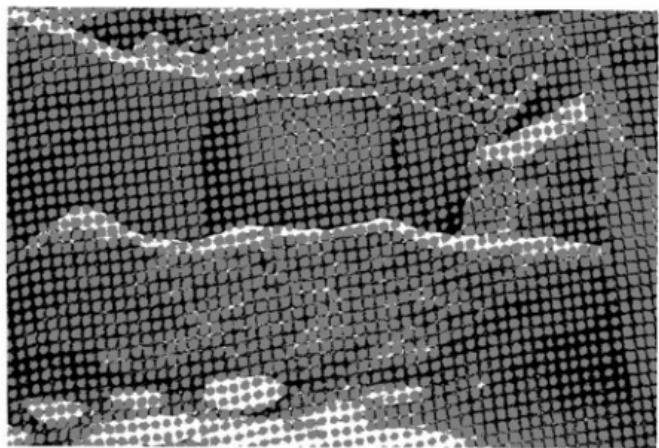
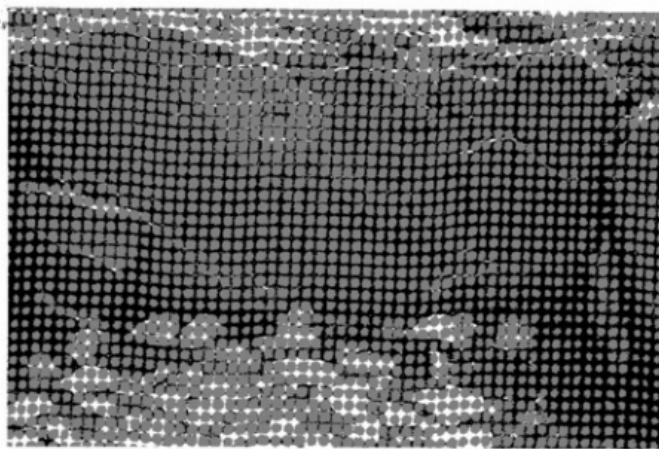
小 野 古 墳



遼 路 近 景

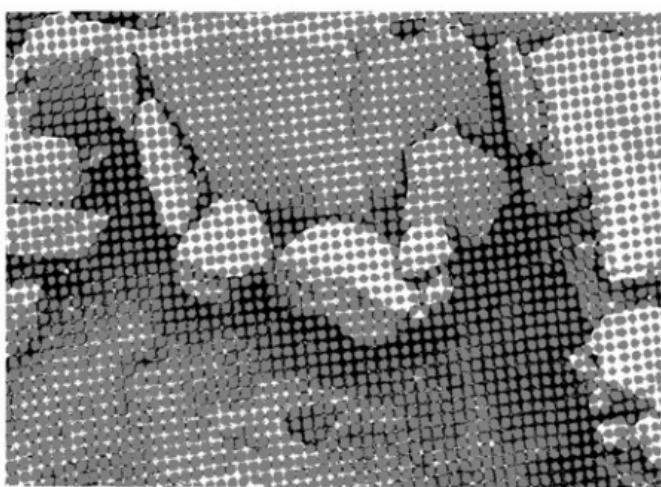


石室全景

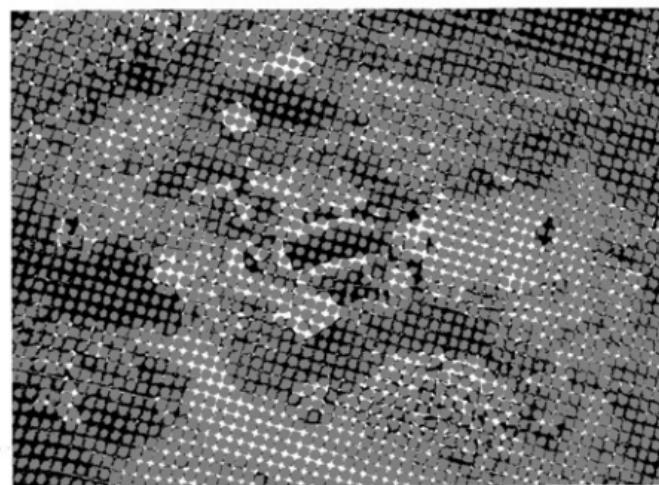


奥壁（上） 開口部（下）

図版 4

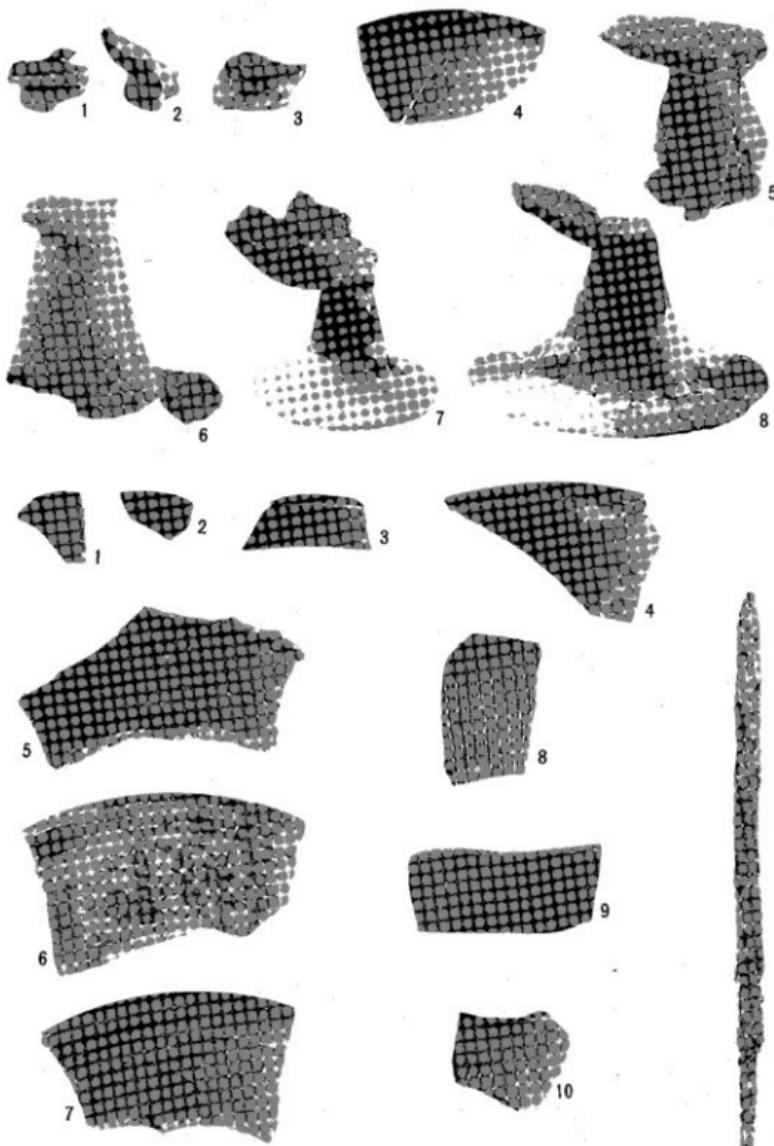


石 宝 開 塞 状 況

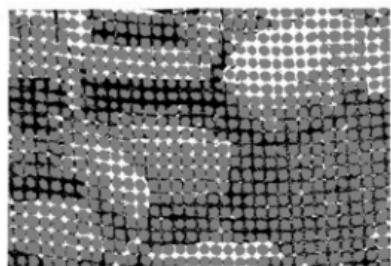


鉄剣出土状況（上） 調査風景（下）

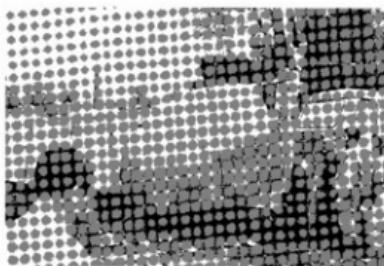
図版 6



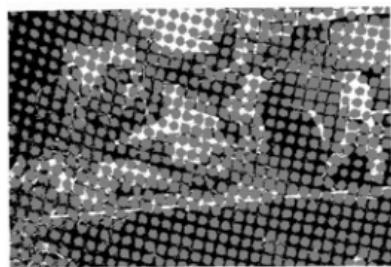
副葬品（鉄剣）及び周辺出土土器



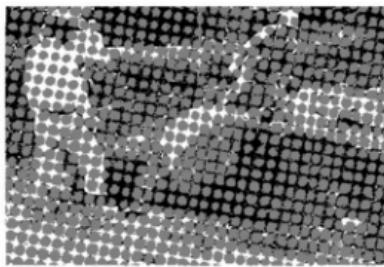
① 石材をクレーンで吊上げる



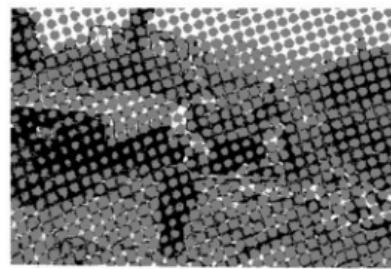
② 石材をトラックに積み込む



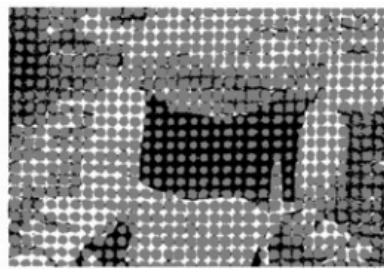
③ 移築場所に石材を運ぶ



④ あらかじめ掘ってある穴へ石材を送り込む

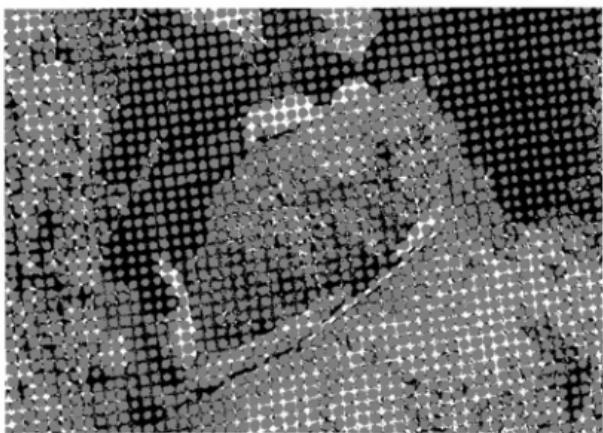


⑤ 図面をみながら石材の位置を決める

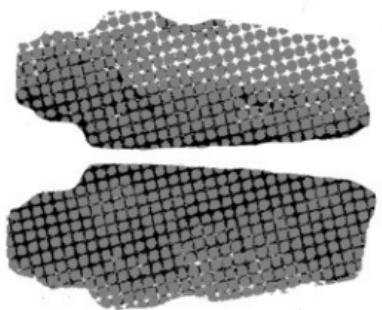


⑥ 移築完了

小野古墳石室移築復元作業



出土石棺



磨製石劍



文化振興課

小野古墳

諫早市文化財調査報告書第2集

昭和53年1月31日

発行所 講早市東小路町1

諫早市教育委員会

印刷所 長崎市出島町15-15

東洋印刷所

